新版

会計学大辞典

編集代表
番場嘉一郎

編集
新井益太郎
岡本　清
武田昌輔
中村　忠
森田哲彌

新版

会計学大辞典

編集代表
番場嘉一郎

編集
新井益太郎
岡本　清
武田昌輔
中村　忠
森田哲彌

中央経済社

S14/1 (日 1-18/5)
会計学大辞典(新版)
T000810

新版 会計学大辞典

昭和54年4月1日　第1版発行

編集代表　番場嘉一郎
発行者　渡辺正一
印刷所　三栄印刷株式会社
製本所　誠製本
発行所　株式会社 中央経済社
東京都千代田区神田神保町1-31-2
電話 (293) 3371(編集)
(293) 3381(営業)
〒101 振替口座・東京0-8432

落丁・乱丁本はお取替えいたします

3534－101436－4621

新版の刊行に当って

この会計学大辞典の第一版は，中央経済社の創立20周年の記念事業の一つとして1971年1月刊行されたのであるが，幸いにして江湖の好評をはくし，ここ8年の歳月にわたって何回となく刷りを重ねることが出来た。この間，会計及び会計学の進歩変転は甚だしく，昭和49年には商法計算規定の大きな改正，企業会計原則の大幅修正があり，その後，連結財務諸表原則及び規則，中間財務諸表作成基準及び規則，中間財務諸表監査基準などの公表，連結監査及び中間決算監査の実施に必要な監査証明省令の改正が行われたのみでなく，外国為替レートの変動制移行とレートの激変に伴って外貨資産・負債等の換算に関する一般的な処理基準をどのように策定するかという問題，日本公認会計士協会の国際会計基準委員会への参加に伴ってわが国の企業会計基準と国際会計基準との整合性をいかにして保つべきかという問題，ここ10年間に及ぶ世界各国でのインフレーションの昂進とこれに対処して妥当な会計情報をどのような方法で提供すべきかという問題，企業の社会的責任論をふまえて企業会計はこれにいかに対応すべきかという企業会計論上の問題等々が抬頭しているのである。

このような会計及び会計学の世界の顕著な変容に直面して本辞典の編集者は旧版の全面的な改訂を行う必要を痛感するにいたった。たまたま 1978 年は中央経済社の創立30周年に当るので，そのときまでに改訂の作業を終了して，新版の出版が可能になるようにしたいという出版社の意向をくんでタイム・テーブルを作成し，一昨年来，改訂作業にとりかかったのである。

新版における項目の分け方は第一版とほぼ同様であり，先ず会計及び会計学の全領域ならびに若干の隣接科学領域を次の19の部門に分け，これを大項目とした。

1	企業会計	2	財務諸表	3	流動資産会計
4	固定資産会計	5	繰延資産会計	6	負債会計
7	資本会計	8	収益費用会計	9	簿記および会計組織
10	原価計算	11	管理会計	12	会計監査

13　業種別会計　14　税務会計　15　マクロ経済会計
16　会計数理　17　会計法規・会計団体・会計学者　18　管理科学
19　ＥＤＰ会計

次いで，これらの大項目のそれぞれについて，可能なかぎり適当な中項目をたて，さらに各中項目ごとに数多くの小項目を配列するという方針をとり，選定項目に重大な脱漏のなきことを期しつつ，第一版と同じく，徹底した小項目主義の辞典を作成することにしたのである。ただしマクロ経済会計の部門では便宜上，おおむね中項目主義を採用し，小項目をたてることを避けた。

この版の中項目の数は64，小項目の数は3,382に上り，小項目数において 第一版より 370余り増加している。これでわかるとおり，新版は新項目を取り入れて辞典としての内容を著しく充実させているわけである。

新版の編集に当っては，私が編集代表者となり，委員として旧版に名をつらねている５氏のほかに，新たに一橋大学の岡本清教授の参加を乞い，陣容を強化して作業をスタートさせたのであるが，途中で明治学院大学の土渕健一教授が病に倒れ，ついに不帰の客となられた。前途有望な若い学徒の早世を惜み，ここに衷心，哀悼の意を表するものである。

編集委員の方々は過去３年間にわたり本務の余暇をさいて，収録項目の選定・補正，執筆方針及び執筆要領の決定，執筆者の選定，付録におさめる会計諸法令の選択，ゲラ刷の校正などの作業に献身的な尽力をされ，本辞典の製作プロセスを当初のスケジュールどおりに進行させ，この新版を誕生せしめたのである。

ここに編集委員の氏名，現職を掲げて，その労を多としたい。

＜編集委員＞(五十音順)

成蹊大学教授　新井益太郎氏
一橋大学教授　岡本清氏
成蹊大学教授　武田昌輔氏
一橋大学教授　中村忠氏
一橋大学教授　森田哲彌氏

また集録項目の選定作業には，編集委員のほか６名の方に編集協力者としてお力ぞえをいただいた。このことによって本辞典の項目体系の一段の充実化をはか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ることができたのである。ここに編集協力者の氏名，現職を掲げて，そのご好意に対し深甚なる謝意を表したい。

＜編集協力者＞

マクロ経済会計	一橋大学教授	倉林　義正氏
管理科学	一橋大学教授	宮川　公男氏
会計数理	東京農工大学教授	藤澤　袈裟利氏
ＥＤＰ会計	公認会計士	伏見　　章氏
銀行簿記	日本興業銀行総務部参事	小和田　国幸氏
銀行簿記	日本興業銀行トロント駐在員事務所主席	廣瀬　信幸氏

19部門にわたる 3,382の小項目の執筆には276名という多数の専門家のご協力をえている。そのご氏名は巻頭に掲げてあるが，本辞典に対して寄せられた学界，実務界のかくも幅広いご支持には感念一入なるものがある。

そもそも，本辞典の第一版は，この新版の編集に当った私どもの恩師である故　太田哲三先生の発意によって編集刊行されたものである。先生は若い頃から簿記会計の辞典を作ろうとする熱心な意欲をもたれていた。本辞典の第一版の刊行趣意書（昭和42年８月）の中で，先生は「多忙な実践家及び学者にとって必要項目を……容易に探し出せる辞書形式は，結局，唯一の参考書となるものであるとの信念の下に，最高水準を示す会計学辞典を完成することは，私の長い間育ててきた夢でありまして，実際に企画したことも一再に止まりませんでした。たまたま，中央経済社の創立20周年を記念し，山下勝治君ならびに番場嘉一郎君が監修の労をとって下さることとなり，また，……新進の学者から編集者としての協力をえることになりましたので，ここに辞典の公刊に全力を傾倒することとしました。」と述べておられる。

先生は昭和の初期に某出版社から簿記会計の辞典の編さんを依頼されたが，項目のカードの作成を引きうけた人が根負けして挫折した。これを何とかしなければならないということでこの某出版社に対して事態収拾の努力をされたのは昭和10年頃のことであったかと思う。私もこの仕事に動員されたので記憶に残っている。しかし遺憾ながらこの企ても流産に終った。中央経済社から創立10周年のこ

ろに頼まれて先生は三度目のモーションを起されたが，項目の収集も大分進展したのに陽の目を見ないでしまった。しかし同社は創立20周年の記念事業の一つとして，懸案の辞典刊行を実現すべく，ふたたび先生に推進方を懇請した。これで先生は，ようやく念願成就にこぎつけられたのである。

先生は第一版の項目収集・整理に当っては若いものを督励して非常な努力をなされた。先生の喜寿の祝，鳩寿の祝の頃には常に辞典の進行状況に気を配られ，一日も早い完成を待たれたのである。第一版の原稿整理が終り，ゲラ刷が続々と出はじめた頃に先生は逝去された。監修者として名を連ねる筈であった山下勝治教授も先生に先だって他界された。第一版に監修者として名を連ねた佐藤孝一教授も先年物故された。

第一版の監修者でこの新版の編集代表として名を残すのは私のみとなった。時の移りの早いことには転た感慨を禁じえない。

会計および会計学の分野・領域は年とともに拡大し，そこに展開される理論も技術も新旧入り乱れて多彩を極める。それが1970年代であった。1980年，1990年代における変容も極めてスピーディーであろう。会計や会計学を学ぶ者は，旧い概念，新しい概念，旧い術語，新しい術語，旧い方式，新しい方式，そういったものにとりまかれざるをえない。私どもは専門家の総動員下に新装なったこの辞典の第二版が，さらにはまた第三版が，錯綜多岐の1970年代末期から20世紀末葉にわたる会計学徒・会計担当者にとっての，有用なトゥールとなることを期待するものである。

終りに創立30周年記念事業の一つとして採算を度外視して本辞典の新版の出版を敢行された中央経済社に対して深甚なる敬意を表する。

1978年清秋

編集代表　番場嘉一郎

刊行のことば

会計および会計学を研究しようとする人々に便宜を与えるため，会計学辞典を作ろうという企てを今から十数年も前に一度したことがある。中央経済社の創立10周年の頃のことであったかと思う。そのときには，編集委員が項目の選定・整理にコリ過ぎ，息切れして頓挫した。こんどは2回目の試みであったが，前回の経験もあり，編集委員にも人を得て，項目の選定も順調に進み，かつ執筆には学界および実務界にわたる二百数十名の方々のご協力をえて，ここにようやく私どもが念願していた会計学大辞典を完成し，江湖におくることができた。会計学および関連諸科学を専攻される方々の総力が結集された結果の所産であり，監修者として感激おくあたわざるものがある。

本辞典では次のような会計および会計学の全領域ならびに若干の関連科学領域から項目が選定されている。

1　企業会計一般	2　財務諸表	3　流動資産会計
4　固定資産会計	5　繰延勘定会計	6　負債会計
7　資本会計	8　収益費用会計	9　簿記および会計組織
10　原価計算	11　管理会計	12　会計監査論
13　業種別会計	14　税務会計	15　社会会計
16　商業数学	17　管理科学	18　機械会計
19　会計法規		

編集委員においては，これらの各大項目について，可能なかぎり適当な中項目をたて，各中項目ごとに数多くの小項目を収集・整理するという方針をとり，選定項目に重大な脱漏のなきことを期しつつ，徹底した小項目主義の辞典を作成することにしたのである。

本辞典の作成にあたっては，主として次の編集委員諸氏から前後数年

間にわたり，項目の選定，監修者の意見にもとづく項目の補正，執筆方針および要領の決定，執筆者の選定，原稿の整理および補正，校正などの作業に献身的な尽力をしていただいた。

成蹊大学教授　新井益太郎氏
成蹊大学教授　武田昌輔氏
明治学院大学教授　土渕健一氏
神奈川大学教授　中村　忠氏
一橋大学助教授　森田哲彌氏

ほかに項目選定に当り，社会会計については中央大学教授合崎堅二氏，会計数理については東京農工大学教授藤澤袈裟利氏，管理科学については東京工業大学教授松田武彦氏，ＥＤＰ会計については公認会計士伏見章氏，銀行簿記については日本興業銀行の大澤敏男氏および白川和則氏のご協力を得ている。

本辞典の成るにあたり，私どもは上記の方々のご好意に対して深甚なる謝意を表さなければならない。

私どもの念頭を去らないのは本辞典の監修者として何かと力を藉された故神戸大学教授山下勝治氏のことどもである。氏は関西の会計学の巨匠として偉業を遺されながら宿痾のために昨年他界された。ここに本辞典の監修者たりしことを識すとともに，この際あらためて故人のご冥福を祈る次第である。

会計および会計学の分野・領域は年とともに拡大し，そこに展開される理論も技術も新旧入り乱れて多彩を極める。それが70年代である。会計や会計学を学ぶ者は，旧い概念，新しい概念，旧い術語，新しい術語，旧い方式，新しい方式，そういったものにとりまかれざるをえない。私どもは専門家の総動員下に成ったこの辞典が，錯綜多岐の70年代における，会計学徒・会計担当者にとっての，有用なトゥールとなることを期待するものである。

終りに20周年記念事業の一つとして採算を度外視して本辞典の出版を

敢行された中央経済社に対して深甚なる敬意を表したい。

1970年清秋

監修者　太　田　哲　三
佐　藤　孝　一
番　場　嘉　一　郎

追　記

太田哲三先生には，立派に出来上ったこの「会計学大辞典」を手にされずに昨年他界された。先生の生前にこの辞典を刊行しえなかったことは，かえすがえすも残念であった。

先生が簿記会計の辞典を作ろうとされたことは今回がはじめてではなかった。先生がまだお若かった頃に某出版社から編さんを依頼されたが，挫折した。これを何とかしなければならないということで事態収拾の努力をされたのは昭和10年頃のことであったかと思う。私もこの仕事に動員されたので記憶に残っている。しかし遺憾ながらこの企ても流産に終った。本辞典の「刊行のことば」にも書かれているように，中央経済社から創立10周年のころに頼まれて先生は三度目のモーションを起されたが，項目の収集も大分進展したのに陽の目を見ないでしまった。しかし同社は創立20周年の記念事業の一つとして，懸案の辞典刊行を実現すべく，ふたたび先生に推進方を懇願し，ようやく念願成就にこぎつけたのである。

さる昭和42年８月に各方面に送られた辞典刊行趣意書の中で，先生は「多忙な実践家及び学者にとって必要項目を……容易に探し出せる辞書形式は，結局，唯一の参考書となるものであるとの信念の下に最高水準を示す会計学辞典を完成することは，私の長い間育ててきた夢でありま

して，実際に企画したことも一再に止まりませんでした。たまたま，中央経済社の創立20周年を記念し，山下勝治君ならびに番場嘉一郎君が監修の労をとって下さることとなり，また，……新進の学者から編集者としての協力をえることになりましたので，ここに辞典の公刊に全力を傾倒することとしました。」と述べておられる。

先生は「こんどこそ」という意気込みで昭和41年夏以来，新たに構想をねられ，大項目，中項目の検討・整理に当たられ，監修協力者や編集委員の選定を行なわれ，また小項目主義の辞典とするとか，辞典名を会計学大辞典とするとかいう意思決定をされ，小項目の選定を編集委員に委ねられた。

編集委員は，42年春から夏にかけて，会合をひらくことおよそ15回余り，委員外の方々にもある種のエーリアの項目選定に協力を仰ぎ，約3,000に上る小項目を確定した。この過程において，主任委員は随時，先生に項目選定作業に関する報告を行ない，諒承を求めた。42年8月に前記の執筆依頼状（刊行趣意書）が発送され，44年夏までには執筆者のほとんど全部から原稿を送っていただくことができた。この間，先生はきわめてお元気で，40年の喜寿の祝に続けて，43年には鳩寿の祝をなされた。このような集いの折にも，先生は気にかけている辞典の進行状況について何かと熱心にわれわれに尋ねられた。

この辞典の原稿の整理が終り，ゲラ刷の出始めた頃から先生は健康の不調を訴えられるようになった。寒い冬は切り抜け，春を過ごし，夏を迎えられたが，ついに昨年，7月4日白玉楼中の人となられた。この辞典は先生の大きな遺業の一つとして後世に伝えられるものである。将来，版を改めるときには，本辞典に先生の名を冠して「太田会計学大辞典」と呼称したいものと考えている。

1971年　早春

番場嘉一郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

執筆者（五十音順）

慶応義塾大学	會田義雄
名古屋工業大学	青木脩
早稲田大学	青木茂男
横浜市立大学	青柳文司
北海学園大学	秋葉国利
武蔵大学	淺羽二郎
慶応義塾大学	安達和夫
早稲田大学	新井清光
成蹊大学	新井益太郎
立教大学	荒川邦壽
東京国税局	有馬憲幸
一橋大学	安藤英義
駒沢大学	飯岡透
中央大学	飯野利夫
富士銀行	石崎純夫
明治大学	石田定夫
早稲田大学	石塚博司
大阪経済大学	泉谷勝美
山口大学	板垣忠
一橋大学	伊丹敬之
横浜市立大学	伊藤博
青山学院大学	稲垣富士男
神奈川大学	稲田卓次
埼玉大学	井上清
中央大学*	井上達雄
日本大学	井上久彌
公認会計士	井上守晴
西南学院大学	井上康男
一橋大学	今井賢一
元東洋大学	岩村一夫
関西大学	植野郁太
中央大学	内山力
横浜市立大学	宇南山英夫
東京大学	江村稔
横浜市立大学	遠藤久夫
大蔵省	大迫勝
明治学院大学	大島美留
電気通信大学	大須賀政夫
日本大学	太田文平
南山大学	大雄令純
滋賀大学	大矢知浩司
横浜国立大学	大藪俊哉
横浜国立大学	大山政雄
青山学院大学	岡下敏
龍谷大学	岡部利良
日本鋼管	岡部正文
一橋大学	岡本清
早稲田大学	小川洌
滋賀大学	小倉榮一郎
慶応義塾大学	尾崎巌
専修大学	小澤康人
神戸大学	小野二郎
流通経済大学	加古宜士
一橋大学*	片野一郎
同志社大学	加藤盛弘
甲南大学	加藤恭彦
名古屋大学	可児島俊雄
法政大学	兼子春三
学習院大学	狩野勇
南山大学	鎌田信夫
東北大学	上村久雄
中央大学	亀山三郎
愛知大学	河合秀敏
専修大学	川口順一
独協大学	河野正男
電気通信大学	河村良吉

神戸大学	河本一郎
松山商科大学	神森智
大阪大学	木内佳市
広島修道大学	岸悦三
東京大学*	木村重義
沖縄国際大学	清村英夫
経済企画庁経済研究所	楠田義
専修大学	國弘員人
小樽商科大学	久野光朗
一橋大学	久保欣哉
神戸大学*	久保田音二郎
松山商科大学	倉田三郎
明治学院大学	倉地幹三
一橋大学	倉林義正
青山学院大学	栗山益太郎
横浜国立大学*	黒澤清
神戸大学	黒田全紀
慶応義塾大学	黒田昌裕
学習院大学	河野豊弘
関西学院大学	小島男佐夫
中野税務署	後藤喜一
神戸商科大学	後藤幸男
滋賀大学	小林健吾
神戸大学	小林哲夫
明治学院大学	小林啓孝
東京工業大学	小林靖雄
国税庁	駒崎清人
亜細亜大学	小松芳明
成城大学	斎藤昭雄
東京大学	斎藤静樹
名古屋大学	齋藤隆夫
早稲田大学	酒巻俊雄
明治大学	坂本清
神戸商科大学*	阪本安一
和歌山大学	櫻井弘藏
税理士	櫻井四郎
専修大学	櫻井通晴
東京国税局	櫻井巳津男
国学院大学	定方鷲男
上智大学	佐藤眞一
千葉商科大学	佐藤信吉
中央大学	佐藤進
横浜国立大学	佐藤精一
成蹊大学	佐藤正雄
横浜市立大学	佐藤宗彌
長崎大学	佐藤好孝
早稲田大学	塩原一郎
東洋大学	品田誠平
青山学院大学	柴川林也
横浜商科大学	島田達巳
明治大学	嶌村剛雄
関西大学	清水宗一
桃山学院大学	徐龍達
成城大学	白鳥庄之助
甲南大学	神馬駿逸
関西学院大学	末尾一秋
関西大学	末政芳信
東北大学	杉本典之
一橋大学	杉山武彦
明治大学	角谷光一
日本興業銀行	妹尾得治
日本大学	園田平三郎
早稲田大学	染谷恭次郎
西南学院大学	高田駒次郎
東京都立大学	高田清朗
神戸大学	高田正淳
京都大学	高寺貞男
慶応義塾大学	高橋吉之助
成蹊大学	高橋三雄
創価大学	高松和男

関西大学	高柳龍芳
創価大学	竹内敏夫
公認会計士	竹内貢
岡山大学	竹下昌三
成蹊大学	武田昌輔
神戸大学	武田隆二
九州大学	武野秀樹
山形大学	竹村欣也
横浜市立大学*	田島四郎
中央大学	田中茂次
税理士	田中嘉男
小樽商科大学	田中良三
神戸大学	谷端長
中央大学	玉田啓八
甲南大学*	近澤弘治
日本大学	忠佐市
大阪市立大学	辻厚生
日本経済女子短期大学	津田久子
明治学院大学	津田博士
青山学院大学*	土田三千雄
元明治学院大学	土渕健一
東京大学	津曲直躬
専修大学	津村英文
九州大学	津守常弘
成蹊大学	徳谷昌勇
一橋大学	時子山和彦
神戸大学*	戸田義郎
中央大学	富岡幸雄
富山大学	友杉芳春
東北大学	豊島義一
関東学院大学	中川美佐子
関東学院大学	永島敬識
国際基督教大学	中島省吾
公認会計士	中瀬宏通
茨城大学	永田忠哉
神戸大学	中野勲
駒沢大学	中原章吉
甲南大学	中村宣一朗
一橋大学	中村忠
税務大学校	中村利雄
東京国税局	中山幸一
元日本大学	中山隆祐
東北大学*	鍋島達
日本大学	西川孝治郎
一橋大学	西川義朗
早稲田大学	西澤脩
神奈川大学	新田忠誓
金沢大学	布村勇二
横浜国立大学*	沼田嘉穂
中央大学	根本光明
城西大学	野澤孝之助
神戸大学	能勢信子
岡山大学	野田孜
公認会計士	野々川幸雄
横浜市立大学	野々山隆幸
神戸商科大学	野村健太郎
日本興業銀行	橋本洋
早稲田大学	長谷川茂
公認会計士	長谷川定吉
日本銀行	花田實
九州大学*	馬場克三
日本租税研究協会	浜野稱雄
名古屋学院大学	林順一
大蔵省	原一郎
中央大学	原田富士雄
全国青色申告会総連合	播久夫
一橋大学*	番場嘉一郎
学習院大学	久野秀男
山口大学	肱黒和俊
中央大学	檜田信男

西南学院大学	平田正敏
日本興業銀行	廣瀬信幸
関西学院大学	深津比佐夫
日本橋税務署	福田光一
東京国税局	藤掛一雄
東京農工大学	藤澤袈裟利
甲南大学	藤田友治
早稲田大学	藤田幸男
八幡大学	藤原欣一郎
公認会計士	伏見章
元明治大学	不破貞春
一橋大学*	古川榮一
大阪府立大学*	本田利夫
横浜商科大学	前川良博
武蔵大学	前田貞芳
舛田財務研究所	舛田精一
関西学院大学	増谷裕久
日本銀行	松浦宏
明治大学	松尾憲橘
東京工業大学	松田武彦
一橋大学	松田芳郎
成蹊大学	松葉邦敏
富士短期大学	松本公文
一橋大学*	松本雅男
成蹊大学	三澤一
神戸大学	溝口一雄
東京国税不服審判所	御園生均
慶応義塾大学	峯村信吉
一橋大学	宮川公男
広島大学	宮川嘉治
公認会計士	宮坂保清
公認会計士	宮田達郎
大阪大学	宮本匡章
公認会計士	村山徳五郎
立教大学	茂木虎雄
神戸大学	森昭夫
成城大学	森清
香川大学	森實
明治大学	森川八洲男
山梨大学	森蘭英輔
一橋大学	森田哲彌
明治学院大学	森藤一男
法政大学	盛田常夫
青山学院大学	守永誠治
東京大学	諸井勝之助
東京大学	矢澤惇
神戸商科大学	安平昭二
千葉商科大学	山浦久司
大阪市立大学	山形休司
亜細亜大学	山口年一
慶応義塾大学	山口操
富山大学	山崎佳夫
亜細亜大学	山邊六郎
慶応義塾大学	山桝忠恕
青山学院大学	山村忠平
神奈川大学	吉田威
神戸商科大学	吉田寛
横浜市立大学*	吉田彌雄
税務大学校	吉牟田勲
滋賀大学	両頭正明
横浜国立大学	若杉明
通商産業省	若宮祐朝
明治学院大学	脇田良一
東洋大学	涌田宏昭
大分大学	和田幹雄
富士通	渡辺昭雄
元神戸大学	渡邊進
明治学院大学*	渡邊實
福島大学	渡邊陽一
中央大学	渡部裕亘

(*……名誉教授)

編　集　方　針

1. 本辞典は会計及び会計学に関するすべての領域（若干の隣接科学領域を含む）を一定の体系のもとに総合し，これをできる限り小項目に分解してアイウエオ順に配列し，全体として会計および会計学の完全な理解を得せしめるよう編集されたものである。
2. 本辞典の項目の分類については，まず，対象領域を体系的に大きく19の大項目に分け，それぞれの分野を幾つかの中項目に分類し，さらに中項目を徹底して小項目に振り分けるという方針をとった。ただし，マクロ経済会計についてはその特殊性を勘案してかなりの程度の中項目主義を採用した。
3. 項目の選定にあたっては本書の初版を基盤として編集委員会が補正するという形で進めた。その結果，初版に比べて各体系のなかでの若干の項目の入れかえと項目数の相当の増加をみた。
4. 各項目の解説については，項目につき最も適当と考えられる字数制限を行って，その範囲内での解説に止めた。したがって，執筆者の方々に相当の御無理をお願いすることになったと思われるが，全体としては釣合のとれた適切な解説がなされているものと信ずる。

   項目については必要あるものにつき編集委員会が関連項目を付記した。
5. 各項目については最も適当と思われる外国語を執筆者にお願いして示してある。その順序は英語，ドイツ語，フランス語などとし，英語のないものはドイツ語，フランス語などとしてある。なお，原稿において外国語がなかったものには一部編集委員会が補足した。
6. 各項目の執筆者については，できる限りわが会計学界および実務界を代表する専門研究者ならびに実務家を選定した。
7. 本文については，特に税務会計編は法令がしばしば改廃されるため，その取扱いの便をはかって別建てとした。

8.　本辞典の構成は体系順項目一覧，本文（五十音順），付録，事項索引より成る。

付録は読者の便をはかり，必要と思われる関連会計諸法令を編集委員会で検討のうえ採録することとした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com